

上郷遺跡発掘調査 報告書

平成10年3月

西茨城郡友部町
上郷遺跡発掘調査会

上郷遺跡発掘調査 報告書



祭祀用縄文土器

西茨城郡友部町
上郷遺跡発掘調査会



第1号住居跡全景



土偶



土版



第2号住居跡全景



溝と柱穴跡

序



上郷遺跡発掘調査会会長

友部町教育委員会教育長

宮山茂夫

加賀田連峰を背にして洞沼川が流れ、その川の北東一帯にひろがる友部町には、先人達が長期に亘って生活を営んだ遺跡が多く点在しています。矢野下地区は、この洞沼川に沿った丘陵地に位置し、温暖化はじめた縄文時代は、この洞沼川低地に沿い海が侵入し、海の幸が得られ、また森林におおわれた山野からは山の幸が得られるなど豊かな自然の中で生活を営む地であったと考えられます。

この上郷遺跡は、友部町史によると縄文時代後期の安行II式の單一遺跡であると記され遺物の散布が多い遺跡として知られていました。この度ここに宅地造成の計画がたてられ遺跡の取扱いについて協議がなされ、開発事業者が、文化財保護法を尊重し、原図者負担の原則をじゅん守して、調査にかかる経費を提供されて、調査が無事終了して、いくつかの成果がえられたことに敬意を表したいと存じます。調査の結果、縄文時代晩期の遺跡の解明と、ここが古代の住居跡としても利用されたこと、更に今まで伝承してきた中世の長峰城の外溝の一部と考えられる遺構が検出され、原始・古代から中世の文化の一端まで明らかになってきたことは、町の歴史上興味深いものがあります。

最後に、調査・整理、そして報告書の刊行等、貴重な資料の作成にご協力されました方々に心から感謝を申し上げるとともに、本書が多くの方々に広く活用され、文化財愛護思想の普及と町史研究に資することを願ってあいさつといたします。

例　　言

1. 本書は、平成9年10月下旬から同年11月上旬にかけて、開発のために、発掘調査した上郷遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、ジャパンプランニング株式会社が、宅地造成工事を計画したため、事前に行なった記録保存のための調査である。
3. 発掘調査のため、友部町教育委員会は、上郷遺跡発掘調査会を設けて、発掘調査を実施した。
4. 発掘調査会の組織は下記のとおりである。

会長 宮山 茂夫（教育長）

副会長 白田 清郎（文審会長）

理事 岡本 規雄（社教課長）

小谷 清治（文審委員）

深谷 忠（　　）

友部平重郎（　　）

伊東 溫（　　）

高野 克己（　　）

檜山 成男（　　）

能島 清光（主任調査員）

監事 上野 学（社教係長）

幹事 斎藤 直樹（社教主事）

調査員 能島 清光（主任調査員）

鯉淵 和彦（副調査員）

指導及び関係機関

茨城県教育委員会文化課

水戸教育事務所生涯学習課

5. 本書の作成は、実測・整図及び考察は鯉淵和彦が行い、その他は能島清光が担当した。

6. 長峰城に関しては、理事の小谷清治氏にご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

7. 作業協力員は次の各氏である。

加藤友三郎、磯野 新吉、江田 真一

鰐淵 重治、横井 義大、渡辺 幸友

坂田ひろこ、坂田 康子、渡辺 照子

目 次

序

例言

1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と環境	3
3. 発掘調査の経過	5
(1)確認調査 (2)本調査	
4. 調査結果	8
(1) 溝	9
第1号溝, 第2号溝	
(2) 壴穴住居跡	14
第1号住居跡, 第2号住居跡, 第3号住居跡	
(3) 土坑	23
第1号土坑, 第2号土坑, 第3号土坑, 第4号土坑, 第5号土坑	
(4) 屋外炉跡	26
第1号屋外炉跡, 第2号屋外炉跡, 第3号屋外炉跡	
(5) 出上遺物について	28
5. まとめ	33
6. 図版	

挿 図 目 次

第1図 上郷遺跡調査地	3
第2図 上郷遺跡の位置と周辺遺跡	4
第3図 上郷遺跡全体図	8
第4図 第1・2号溝実測図	11~12

第5図	第1・2号溝土層断面図	13
第6図	第1号住居跡実測図—1—	15
第7図	第1号住居跡実測図—2—	16
第8図	第1号住居跡遺物出土状況図	17
第9図	第2号住居跡実測図—1—	19
第10図	第2号住居跡・カマド実測図—2—	20
第11図	第3号住居跡実測図—1—	21
第12図	第3号住居跡・カマド実測図—2—	22
第13図	第1～5号土坑実測図	25
第14図	第1～3号屋外炉実測図	27
第15図－1	出土遺物実測図（1～15）	30
第15図－2	出土遺物実測図（16～22）	31
第16図	拓影図（1～17）	32

図 版 目 次

- 図1 遺跡全景、溝、溝断面
- 図2 第1号住居跡遺物出土状況(1)
- 図2 第1号住居跡遺物出土状況(2)
- 図3 第2号住居跡全景
- 図3 第2号住居跡土師器出土状況
- 図4 第3号住居跡全景
- 図4 第3号住居跡柱穴より土師器出土状況
- 図5 第1号土坑全景
- 図5 第2号土坑全景
- 図5 第3号土坑全景
- 図6 第4号土坑全景
- 図6 第5号土坑全景
- 図6 第1号屋外炉跡
- 図7 第2号屋外炉跡
- 図7 第3号屋外炉跡
- 図7 第1号土坑出土石器

図8 繩文土器(1)

図9 繩文土器(2)

図10 繩文土器(3)

図11 土師器(1)

図12 土師器(2)

図13 石器(1)

図14 石器(2)

図15 石器(3)

図16 石器(4)

図17 石器(5)

1. 調査に至る経過

潤沼川ぞいの低地を眼下に、主要地方道大洗妃部線の北側の台地に位置するこの地は、平成4年にも建築分譲造成工事計画がたてられた。埋蔵文化財の取扱いについて協議がなされ、記録保存による発掘調査を実施することになったが、調査費等の調査がととのわずに開発は見送ることとなった。今回、再び、地主側の土地売却の要望をうけた地元不動産会社和光不動産（取引主任者永井正徳）は、該当地の遺跡の有無と取扱いについて、7月下旬町教育委員会に照会をしてきた。町教育委員会は、この地は遺跡台帳にも周知されている「上郷遺跡」であり、開発にあたっては、発掘調査による記録保存の処置が必要であることを回答した。

会社側は、地主より土地の売却を依頼されているので、予定される開発業者とも協議し、発掘調査を実施することで了承をした。そして調査費等の負担計上にあたり、遺跡の状況を把握するために確認調査を実施したい旨、再度町教育委員会は要請をうけた。そこで、平成9年8月6日～7日の2日間確認のための調査を実施することにした。

現地の状況は、長期に亘って耕作しなかつたため雑草がおい茂り、東側の竹林からも根の侵入もあって雑地化していく、表面観察で見る状況ではなかった。町教育委員会は、重機を導入して、トレーナによる試掘をするこにして、1.5m幅のトレーナを、調査エリアの四方と、東西方向の中心部5箇所を設定した。

まず北側に西から東へトレーナを入れると表土から約30cmのところでローム層にあたり、焼土を確認、先へすすむとトレーナ内から縄文と土師の細片が出土した。また北から南へ竹林にそってトレーナを入れると溝状の落込みがみられ、東西のトレーナからは、表土からローム層まで約20cmと浅く、町道ぞいの南北のトレーナは東西トレーナと同様、ロームまで浅く縄文と土師の細片がみられた。中央部の東西のトレーナからは、石器類の破片と縄文・土師の細片が出土した。



以上の結果から、ここには、縄文と土師器を伴う遺跡が所在することが確認できたが、遺構の数と溝状遺構の性格及び所在地点は明確にできないことから、発掘調査を実施することが約束されていたので、全般に表上除去することにした。

表土除去にあたっては、法切りバケット付車機を入れ、15cmから20cmほどを慎重に削ながら観察したところ、住居跡3軒と土坑5基、屋外炉跡3基、溝状遺構2条が確認され、確認調査報告書を作成して事業側に提示した。

不動産会社は、開発会社と地主等で協議を重ね、平成9年9月12日付で、文化財保護法57条の2項による上木工事等の発掘届をKKジャパンプランニング社が町教育委員会を通して届出があった。町教育委員会は、これをうけて、法57条の1を届出し、10月下旬から本調査を実施することとなった。

2. 遺跡の位置と環境

友部町は、昭和30年1月、宍戸町・大原村・北川根村の合併によって成立し、総面積は58.73km²である。町の北部と西部は友部丘陵と呼ぶ丘陵地帯で、友部駅付近から旭町にかける友部町の主部は標高30~40mの台地となった平坦地である。この台地に北側より潤沼前川、抜折川、潤沼川が貫流し、縄文時代から人々の生活の場であったのでいま多くの遺跡が点在している。

友部町史によると、この潤沼川ぞいの遺跡は、上流の「星山遺跡」からはじまって15遺跡を数える。上郷遺跡は、その潤沼川の友部地内のほぼ中央に位置し、矢野下上郷字塙ノ木1376-1~1404番地の標高30mほどの潤沼川東側台地にある。この台地の西側には潤沼川低地で水田地帯がひろがっている。なお北西側には、縄文中期~後期に比定される橋爪遺跡があり、それにつづく遺跡である。調査対象地は、上郷1401番地の1の地目は畑地であるが、現状は雑草地に化している。西側は町道で、旧富士池とよぶ低湿地へ通じる小径から北側にあたり、東側は竹林で、その先は平地林がつづいている。なお、南側の畑地は、すでに削平されていて調査対象地からみて、ほぼ1mほど低くなっている。遺跡台帳には、この南側の畑地まで、範囲に含まれているが、この畑地の遺構は失われていると考えられる。

調査地は、地域の人の話では、以前より土器・石器の散布が著しく、耕作者は拾いあつめては、処分するほどであったといい、また遺物の採集できる土地として多くの人に知られていたという。このことから、地下に埋葬されていた遺構もかなり破損され、耕作や土の移動によって遺物が露出した遺跡であることが予想された。



第1図 上郷遺跡調査地



①城の内遺跡 ②橋爪遺跡 ③上郷遺跡

第2図 上郷遺跡の位置と周辺遺跡

3. 発掘調査の経過

(1) 確認調査



- 8月6日（水）晴
地区設定と重機を入れて、トレンチによる遺構確認を実施する。
調査員2名、町教委2名、作業協力者3名でトレンチ5本を精査する。



- 8月7日（木）晴
全面に法切りバケット付重機による表土除去を実施する。住居跡3軒、土坑・屋外炉跡、溝2条を確認する。平板測量を実施する。

(2) 本調査

- 10月15日（水）晴

上郷遺跡発掘調査会を設立、確認調査結果の報告と調査計画、規約、予算等を審議する。

- 10月19日（日）晴

調査担当者による現地調査、調査地点、調査方法、設営場所等について検討。



- 10月22日（水）晴
福田神官の祈祷による慰靈祭を行う。調査会長をはじめ、調査会理事、ジャパンプランニング㈱役員、調査担当者等参列、終了後、設営作業を行う。



○10月25日（土）晴

作業開始、調査についての方法、諸注意、執務規則の説明。

遺構に露出する遺物採集と遺構検出。

住居跡の発掘、表土が浅く、床面の確認を慎重にすすめる。午後より住居跡ベルトのセクション測量と、屋外か跡の縦割り。来訪者、地域住民3名、深谷理事。

○10月26日（日）晴

1号住居跡の発掘 遺物が多量に出土、ベルトセクション測量、ベルトはずし。

2号住居跡の発掘 柱穴の検出、ベルトはずし、エレベーション測量。

3号住居跡の発掘、柱穴の検出、ベルトはずし、エレベーション測量、土坑の縦割りとセクション測量、2号土坑より土偶出土する。

屋外炉跡の縦割り。来訪者、地元民4名。

○10月27日（月）晴

1号住居跡の精査、柱穴の検出。

溝の試掘、深さ1m~1.5m、溝2条が分離していること等を確認する。

風が強く、砂ほこりがあがって調査不能のため3時30分で作業を中止する。

来訪者、開発会社3名、小谷理事。

○10月28日（火）晴

重機による溝の発掘、埋没する土の除去を慎重にすすめる。

遺物検出と、ローム層までは手作業ですすめる。





○10月29日（水）晴
溝の精査をすすめる。午後より、2班に分かれ、溝のベルトセクション測量と、土器洗浄作業をすすめる。

○10月30日（木）晴
1号住居跡の精査

溝の精査、柵列と思われる柱穴を検出する。

○11月2日（日）晴
溝のベルトはずしと測量。

1号住居跡の土器出土状況の測量。
1号住居跡遺物のとりあげと床面の精査。
来訪者、友部町社会福祉協議会宍戸支部、
青少年健全育成をめざす委員会40名、現地
説明会を実施する。

○11月3日（月）晴
1号住居跡の精査、エレベーション測量、
遺物のとりあげ、溝の柵列の検出と測量。

○11月4日（火）晴
発掘現場の取りかたづけ。
1号住居跡出土遺物の洗浄（歴史民族資料
館）
来訪者 小谷理事



○11月8日（土）晴

出土遺物の分類と報告書作成打合せ。

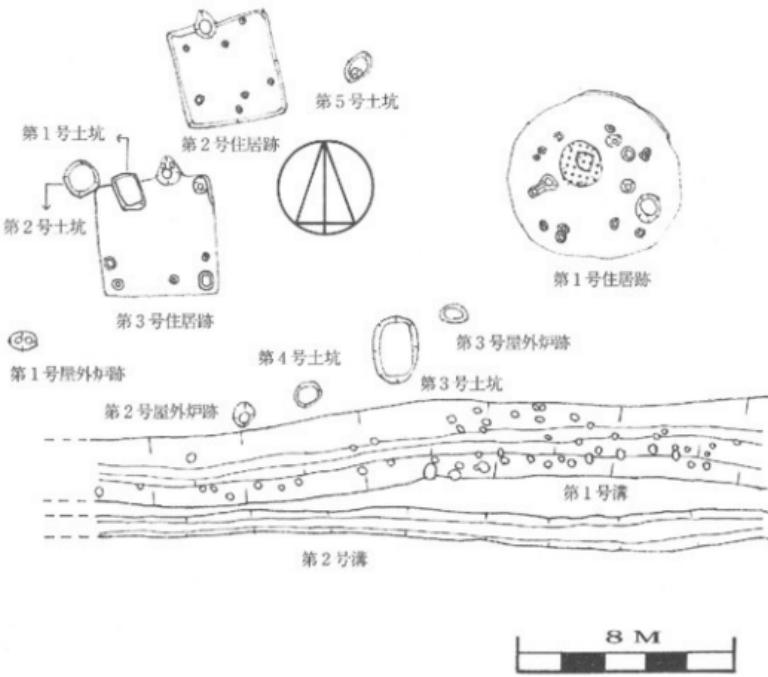
来訪者 小谷理事

○11月9日（日）晴

遺物の分類作業と写真撮影、測量図の整理。

来訪者 小谷理事

4. 調査結果



第3図 上郷遺跡全体図

当遺跡から3軒の竪穴住居跡・土坑5基・溝2条・屋外炉跡3基が検出された。遺構は、すべて耕作による擾乱を受け、遺物は、縄文土器片・土師器片・石器類・土製品類などが出土している。

以下、検出された住居跡・土坑・溝・屋外炉跡の特徴や主な出土遺物について記載する。

(1) 溝

第1号溝（第4図）

位置 調査区の南端部に位置する。

規模と形状 上幅1.90～3.40m、下幅0.70～1.50m、深さ0.70～1.00mで両端部とも調査エリア外へ延びている。調査は26.6mである。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。中央部が幅30cm、深さ20cmほど掘り込まれていて、土層から板状の物を立てていたと思われる痕跡が見られ、北側から土を入れて、版築している。そして、溝の中央部から多数の柱穴を検出した。幅20～60cm、確認面からの深さ17～52cmである。特に溝の南傾斜に多数見られ、位置からみて支え柱と考えられる。

覆土 黒褐色土、暗褐色土から成り、ローム粒子やロームブックを多量または中量含み、炭化物も少量含んで自然堆積している。

遺物 覆土中から多数の縄文土器片や石器類が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと判断される。時期・性格については、古い地図や言い伝えから館に伴うものと思われる。

第2号溝（第4図）

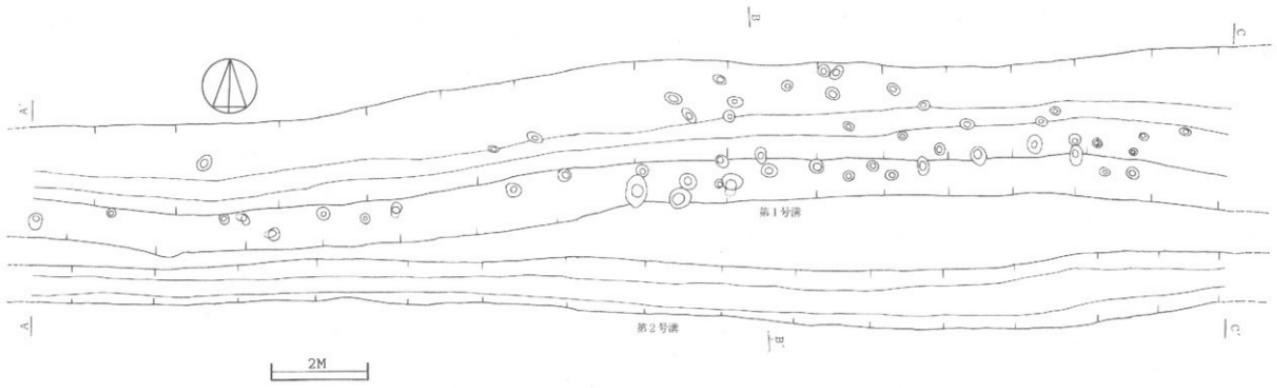
位置 調査区の南端部に位置する。

規模と形状 上幅0.75m～1.00m、下幅0.30～0.40m、深さ0.30～0.50mで両端部とも調査エリア外へ延びているが、調査は26.6mである。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で、しまってい る。

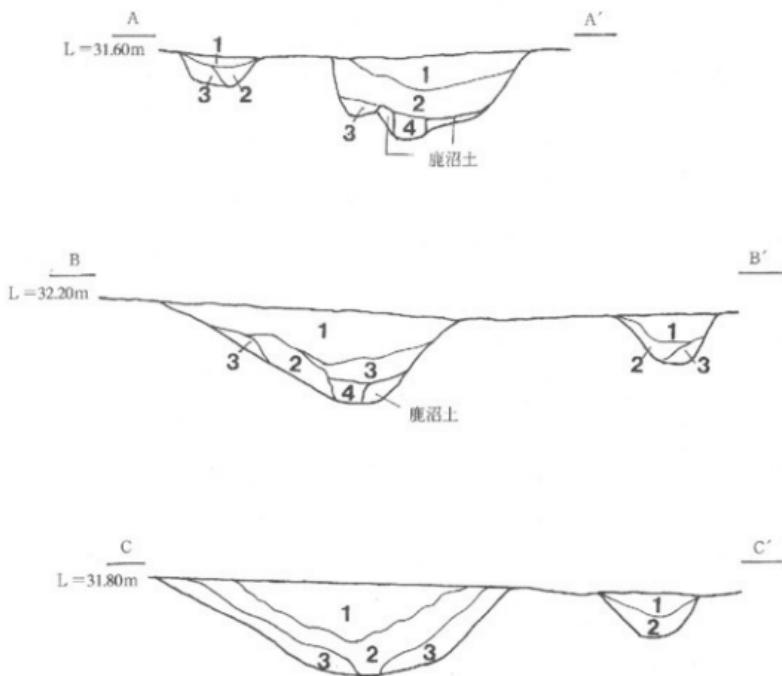
覆土 黒褐色土から成り、ローム粒子やロームブロックを多量ないし少量含み、自然堆積していると思われる。

遺物 出土していない。

所見 時期・性格は詳細ではないが、第1号溝同様に館に伴うものと思われる。



第4図 第1・2号溝実測図



第1号溝土層解説

- 1 黒褐色土でローム粒子・鹿沼土粒子を中量、炭化粒子少量含み、しまりよい。
- 2 黒褐色土でロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量含み、しまりよい。
- 3 黒褐色土で鹿沼土ブロック・ローム粒子を中量含み、しまり軟らかい。
- 4 暗褐色土でローム粒子・ロームブロックを多量に含み、しまり軟らかい。

第2号溝土層解説

- 1 黒褐色土でローム粒子を多量に含み、しまり硬い。
- 2 黒褐色土でローム粒子を多量、ロームブロックを少量含み、しまりよい。
- 3 黒褐色土でロームブロック・ローム粒子を多量に含み、しまり硬い。

第5図 第1・2号 溝土層断面図

(2) 壁穴住居跡

第1号住居跡（第6図—1—）

位置 調査区の北東部に位置する。

規模と平面形 東西6.50m・南北6.25mのほぼ円形を呈していると思われる。壁の立ち上がりは、北東部の一部を除いて、耕作による搅乱のため確認できなかつたので、床面の範囲から平面形は推定した。

壁 確認できた壁高は10cmぐらいで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、柱穴の内側は硬く踏み固められている。

ピット 15本のピットを検出した。いずれも炉跡を取り囲むように位置しているので柱穴と思われる。規模は、径30~60cm・深さ60~100cmである。

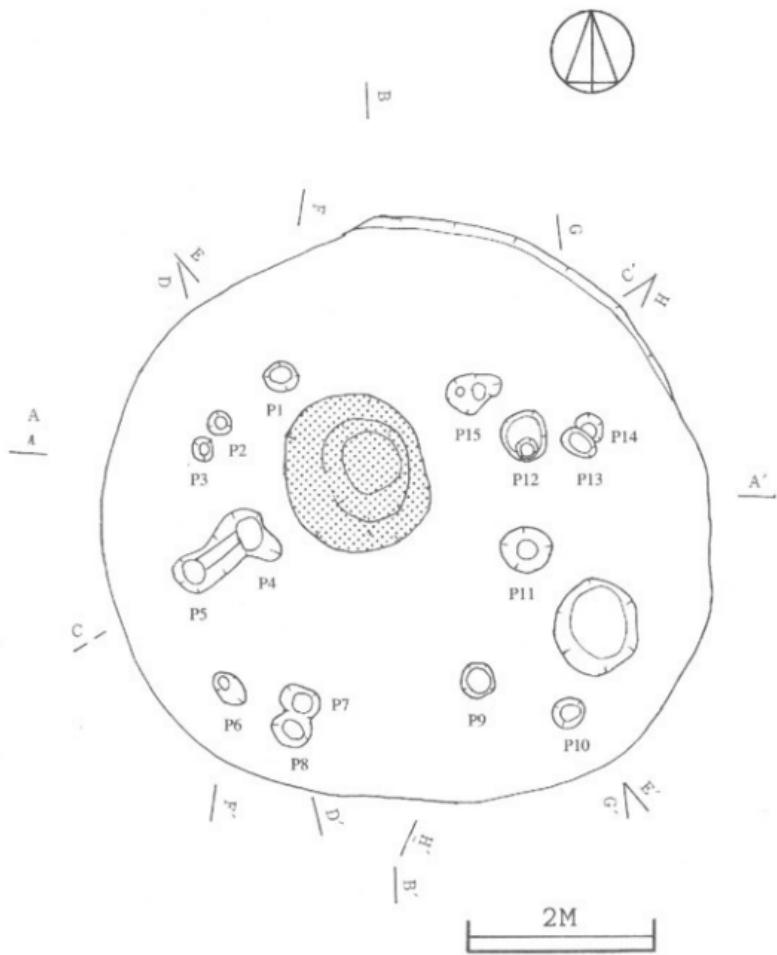
貯蔵穴 南東部から径60cm・深さ70cmの円形を呈し、貯蔵穴と思われる。

炉跡 床面北西寄りから短軸1.50m・長軸1.80mの椭円形を呈し、深さ25cmで、すり鉢状に掘りくぼんでいる。堆積物は、灰・炭化物・貝類等で、火床は赤く硬く焼けている。

覆土 黒褐色土、暗褐色土から成り、ロームブロックとローム粒子を中量または多量含み、交差に重なって自然堆積していると思われる。

遺物 繩文土器片・石器類（石斧、磨石）・土製円盤等である。炉跡を中心に散乱していた。土器片は、耕作等による搅乱を受けているためほとんど接合できなかつた。

所見 本跡は、遺構の形態や遺物等から縄文時代晩期に比定される住居跡と考えられる。

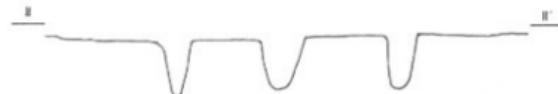


第6図 第1号住居跡実測図—1—



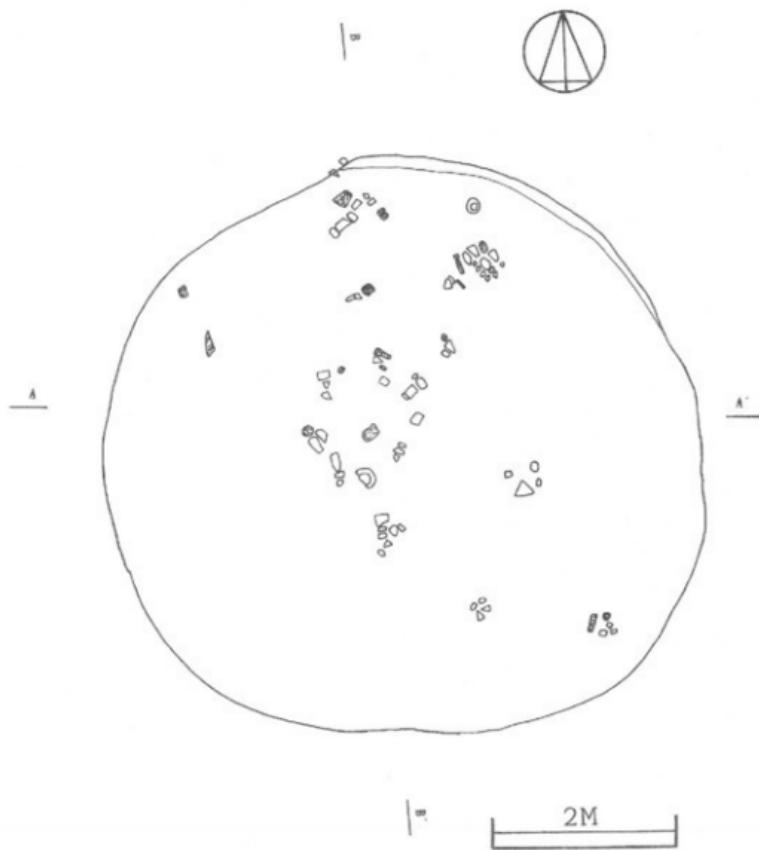
第1住居跡土層解説

- 1 暗褐色土でローム粒子を多量に含み、しまりよい。
- 2 褐色土でロームブロックを中量含み、しまりよい。
- 3 黒褐色土でローム粒子を中量含み、しまりよい。
- 4 暗褐色土でローム粒子を少量含み、しまりよい。



2M

第7図 第1号住居跡実測図—2—



第8図 第1号住居遺物出土状況図

第2号住居跡（9図）

位置 調査区の北部に位置する。

規模と平面形 一辺3.80mの隅丸方形を呈している。主軸方向は、N-14°-Wを指している。

壁 確認できた壁高は、10~15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 カマド手前から柱穴の内側にかけて、硬くよく踏み固められている。

ピット 7本の柱穴で、P 1~P 6は径20~30cm・深さ20~50cmでいずれも主柱穴と思われる。

P 7は径20cm・深さ20cmで、カマドの反対側に位置していることから出入り口施設に伴う柱穴と考えられる。

カマド 北壁の北西寄りに付設されており、耕作により搅乱されて火床部だけの検出である。火床は、床を約20cm掘り込み、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物が堆積している。

出土遺物 遺物は極わずかで土師器の壊片と石が出土している。

所見 本跡は、造構の形態や遺物等から古墳時代に比定される住居跡と考えられる。

第3号住居跡（11図）

位置 調査区の北西寄りで、第2住居跡の1.80m南西下に位置している。

規模と平面形 一辺4.40mの隅丸方形を呈している。主軸方向は、N-6°-Wを指している。

壁 壁は、耕作による搅乱がひどく検出できなかった。

床 カマド手前から柱穴の内側にかけて、硬くよく踏み固められている。

ピット 5本の柱穴で、P 1~P 4は径30~60cm・深さ30~50cmで配置から主柱穴と思われる。

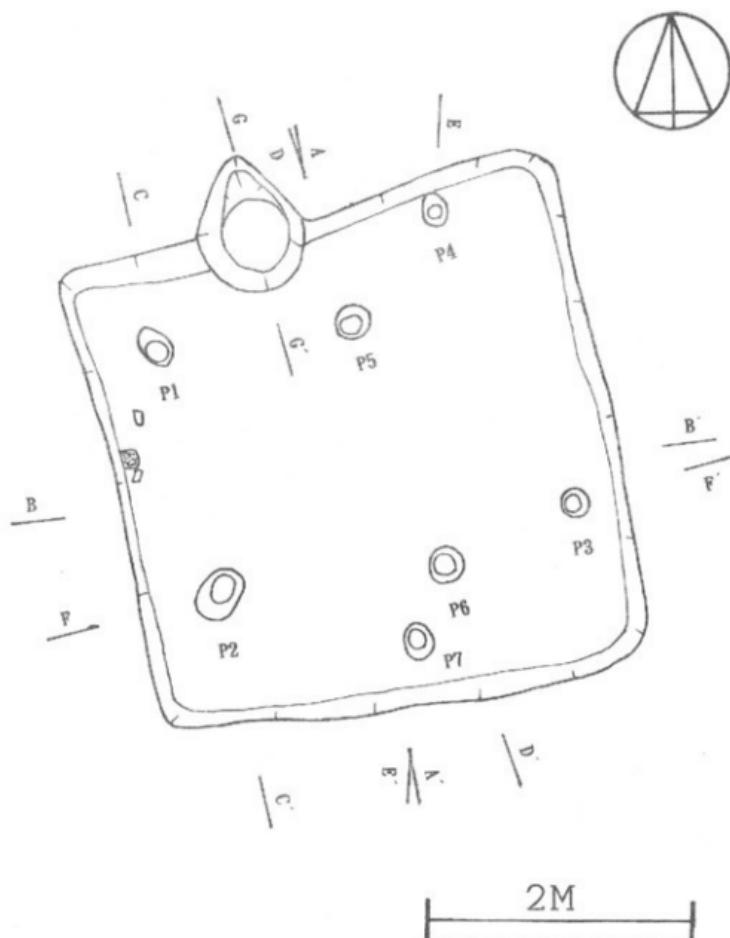
P 5は径25cm・深さ30cmでカマドの反対側に位置していることから出入り口施設に伴う柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部から径60~70cm・深さ30cmの楕円形を呈し、配置から貯蔵穴と思われる。

カマド 北壁の北東寄りに付設されており、耕作により搅乱されて火床部だけの検出である。火床は、床を約15cm掘りくぼみ、焼土ブロック・焼土粒子・粘土ブロックが堆積している。煙道部と思われる所から補強材の石2点が出土している。

出土遺物 遺物は極わずかで土師器の坏片。甕片等が出土している。

所見 本跡は、造構の形態や遺物等から古墳時代に比定される住居跡と考えられる。



第9図 第2号住居跡実測図—1—



第2号住居跡土層解説

- 1 暗褐色土でローム粒子とロームブロックを中量、炭化粒子を少量含み、しまりよい。
- 2 暗褐色土でローム粒子を多量、焼土粒子を中量含み、しまりよい。

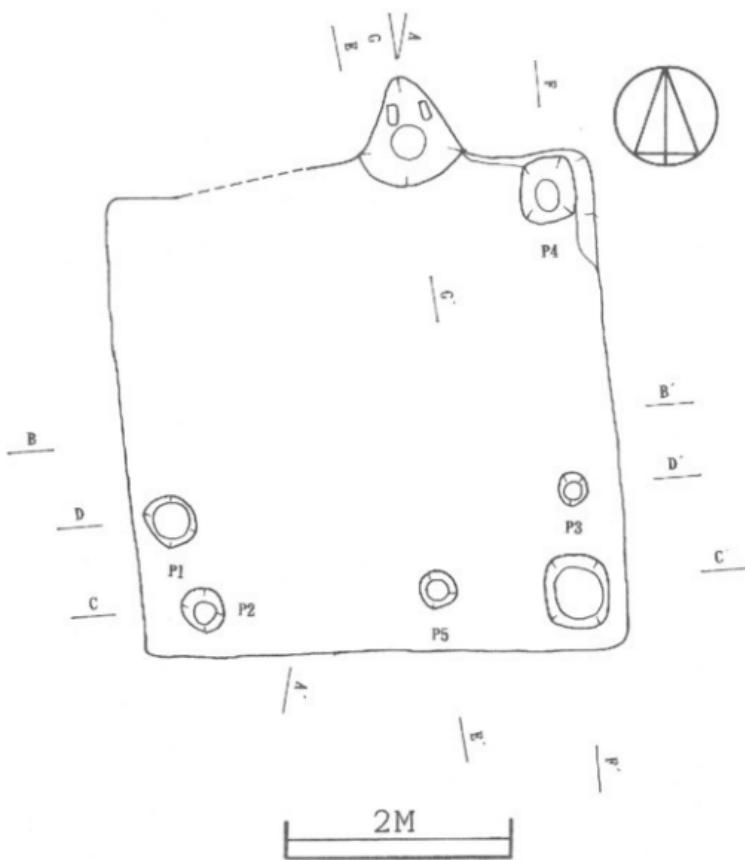


2M

第2号住居跡カマド土層解説

- 1 赤褐色土で焼土粒子を多量、炭化物・粘土ブロックを中量含み、しまりよい。
- 2 赤褐色土（焼土）でよく焼けている。
- 3 赤暗褐色土で焼土ブロック・焼土粒子を中量含み、しまりよい。

第10図 第2号住居跡・カマド実測図—2—



第11図 第3号住居跡実測図一1-



第3号住居跡土層解説

- 1 褐色土でしまりよい。



2M

第3号住居跡カマド土層解説

- 1 赤暗褐色土で焼土粒子を多量、焼土ブロックを中量、粘土ブロックを少量含み、しまりよい。
- 2 赤褐色土（焼土）でよく焼けている。

第12図 第3号住居跡・カマド実測図—2—

(3) 土坑 (13図)

第1号土坑

本跡は、第3号住居跡の北西コーナーと複合している。

規模と平面形 短軸1.00m・長軸1.40m・深さ30cmの長方形を呈している。

側面と底面 側面は外傾し、底面は平坦である。

覆土 黒褐色土でロームブロックやローム粒子を多量に含み、しまりよく自然堆積している。

遺物 覆土から石斧・磨石・石棒・叩き石・凹石等が出土している。

所見 性格等は不明で、出土遺物等から縄文時代に比定される遺構と思われる。

第2号土坑

本跡は、第1号土坑の西側に隣接している。

規模と平面形 径1.30m・深さ30cmのほぼ円形を呈している。

側面と底面 側面は、外傾し、底面は平坦である。

覆土 黒褐色土で多量のローム粒子や少量のロームブロックを含み、しまりよく自然堆積している。

遺物 覆土から土偶の顔の部分が出土している。

所見 性格等は不明で、出土遺物等から縄文時代に比定される遺構と思われる。

第3号土坑

本跡は、第1号溝の北端に隣接している。

規模と平面形 短軸1.70m・長軸2.50m・深さ35cmの長方形を呈している。

側面と底面 側面は外傾し、底面は平坦である。

覆土 黒褐色土で多量のローム粒子や中量のロームブロックを含み、しまりよく自然堆積している。

遺物 覆土から縄文土器片・土版・石錘が出土している。

所見 性格等は不明で、出土遺物から縄文時代に比定される遺構と思われる。

第4号土坑

本跡は、第1号溝の北端に隣接している。

規模と平面形 径1.00m・深さ18cmの円形を呈している。

側面と底面 側面は外傾し、底面は平坦である。

覆土 暗褐色土で多量のローム粒子や少量のロームブロック・炭化物を含み、しまりよく自然堆積している。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 時期・性格等は不明である。

第5号土坑

本跡は、第2号住居跡の東側に位置している。

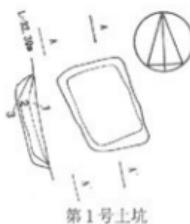
規模と平面形 短軸0.8m・長軸1.10m・深さ30cmの長方形を呈している。

側面と底面 側面は外傾し、底面は平坦である。

覆土 暗褐色土で多量のローム粒子や中量のロームブロックを含み、しまりよく自然堆積している。

遺物 遺物は出土しなかった。

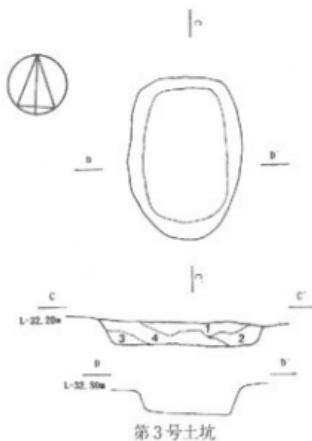
所見 時期・性格等は不明である。



第1号土坑

第1号土坑上層解説

- 1 暗褐色土でローム粒子を多量、ロームブロックを少量含み、しまりよい。
- 2 暗褐色土でローム粒子を多量、ロームブロック中量、炭化粒子少量含み、しまりよい。



第3号土坑

第3号土坑上層解説

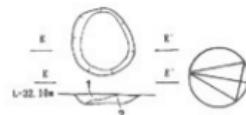
- 1 黒褐色土でローム粒子・ロームブロックを多量、土器片少量含み、しまりよい。
- 2 黒褐色土でローム粒子を多量、ロームブロック少量含み、しまりよい。
- 3 黒褐色土でローム粒子を多量、ロームブロック中量含み、しまりよい。
- 4 黒褐色土でローム粒子・ロームブロックを多量、土器片少量含み、しまりよい。



第2号土坑

第2号土坑上層解説

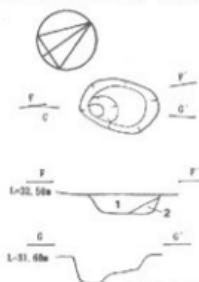
- 1 黒褐色土でローム粒子を中量含み、しまりよい。
- 2 黒褐色土でローム粒子を多量、ロームブロックを中量含み、しまりよい。
- 3 黒褐色土でローム粒子を多量、ロームブロックを少量含み、しまりよい。



第4号土坑

第4号土坑上層解説

- 1 暗褐色土でローム粒子を多量、炭化物少量含み、しまりよい。
- 2 暗褐色土でローム粒子を多量、ロームブロック・炭化物を少量含み、しまりよい。



第5号土坑

第5号土坑上層解説

- 1 暗褐色土でローム粒子・ロームブロックを多量に含み、しまりやや歓らかい。
- 2 褐色土でロームブロックを中量含み、しまりよい。

第13図 第1～5号土坑実測図

(4) 屋外炉跡 (14図)

第1号屋外炉跡

本跡は、第3号住居跡の南西側に位置している。

規模と平面形 短径0.70m・長径1.00m・深さ10~18cmの梢円形を呈している。

火床は二か所ですり鉢状によく焼き固まっている。

覆土 赤褐色土または暗赤褐色土でよく焼けている。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

所見 時期の詳細は不明であるが、性格は遺構の状態からバーべキューの跡と思われる。

第2号屋外炉跡

本跡は、第4号土坑の西側に位置している。

規模と平面形 短径0.78m・長径0.90m・深さ10cmの梢円形を呈している。

幅15cmで穴のまわりが赤く焼けているが、その内側は暗褐色土である。

覆土 暗褐色土で上層だけが赤く焼けている。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

所見 時期・性格の詳細は不明である。

第3号屋外炉跡

本跡は、第3号土坑の北東側に位置している。

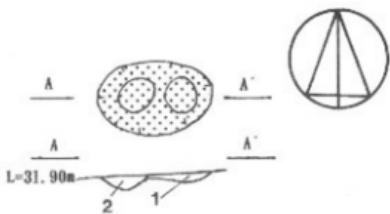
規模と平面形 短径0.70m・長径1.00m・深さ10cm梢円形を呈している。

火床は一か所ですり鉢状によく焼き固まっている。

覆土 赤褐色土でよく焼けている。

出土遺物 覆土から縄文土器片が出土している。

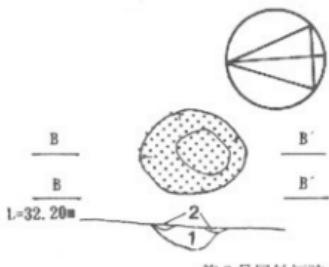
所見 性格はバーべキューの跡で、時期は縄文時代に比定されると思われる。



第1号屋外炉跡

第1号屋外炉跡土層解説

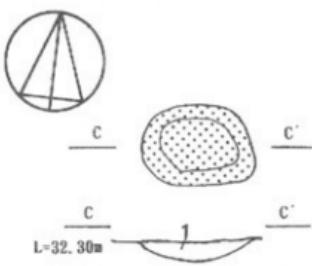
- 1 赤褐色土（焼土）でしまり硬い。
- 2 暗赤褐色土で焼土ブロックを中量、灰少量含み、しまりやや歓らかい。



第2号屋外炉跡

第2号屋外炉跡土層解説

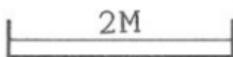
- 1 暗褐色土でしまりやや歓らかい。
- 2 赤褐色土（焼土）でしまり硬い。



第3号屋外炉跡

第3号屋外炉跡土層解説

- 1 赤褐色土（焼土）でしまり硬い。



第14図 第1～3号屋外炉跡実測図

(5) 出土遺物について

本跡から出土した遺物は、縄文晩期の土器、石斧、石錘、凹石、土版、土製円盤、磨石、石棒、石剣、土偶の頭部、土師器、陶器片等である。縄文土器の破片が多く石器と土製品は少しである。遺物の多くは、操作等の攪乱で形や所在地がはっきりしない。それらの中で、主だった遺物のみ本誌に掲載する。

(1) 石器（第15図1～13）

第1号住居跡から磨製石斧（1・2）、磨石（3～5）が出土した。1・2は、現存長7.9・16.7cm、最大幅6.2・6.0cm、厚さ3.5・3.3cm、重量300・510gで、石質は砂岩である。3～5は、最大幅5.3・5.3・6.9cm、厚さ2.0・2.6・4.5cm、重量90・160・320gで、石質は砂岩・安山岩質（輕石）である。

第1号土坑から磨製石斧（6・7）、打製石斧（8）、石棒（9）、石剣（10）が出土した。6・7は、現存長10・10.3cm、最大幅5.8・5.6cm、厚さ3.7cm、重量360・340gで、石質は砂岩である。8は、現存長12.2cm、最大幅8.5cm、厚さ2.2cm、重量310gで、石質は泥岩である。9は、現存長7.7cm、最大幅3.3cm、厚さ1.5cm、重量60gで、石質は変成岩である。10は、現存長11.5cm、最大幅2.2cm、厚さ1.4cm、重量70gで、石質は泥岩である。頭部は無文である。

第3号土坑から磨石（11）、石錘（12）、磨製石斧（13）が出土した。11は、最大幅8.0cm、厚さ4.8cm、重量420gで、石質は安山岩である。12は、現存長5.1cm、最大幅3.4cm、厚さ1.3cm、重量30gで、石質は、泥岩である。加工方法は、長軸両端から溝を入れており、有溝石錘と呼ばれる縄文晩期の錘具である。

13は、現存長7.1cm、最大幅4.6cm、厚さ2.6cm、重量120gで、石質は砂岩である。

(2) 土製品（第15図14～18）

第2号土坑から土偶の頭部（14）が出土した。現存長3.7cm、最大幅4.6cm、厚さ1.6cm、重量30gである。頭部は偏平な楕円形を呈し、眉と鼻を隆起させ、目と口を沈線で描き、右目に朱塗りの痕跡がある。頭頂部から側頭部にかけて沈線を配している。手法は、写実的である。これは、形や模様から縄文晩期に比定される。

第3号土坑から土版（15）が出土した。現存長5.7cm、最大幅5.3cm、厚さ1.1cm、重量60gである。裏表に三角形・半円形・四角形状の沈線を配している。これは、形や模様から縄文晩期に比定される。

第1号溝から土製円版（16～18）が出土した。最大幅4.0・3.9・3.7cm、厚さ0.5・0.7cm、重量5・10・8gである。形状は、偏平な楕円形を呈している。いずれも、縄文土器の胴部破片に整形を施し、周縁を研磨した円版形の土製品である。これらは、縄文晩期に最盛期をむかえる。い

ずれも周辺からの流れ込みと思われる。

(3) 土器（第15図19～23）（第16図1～17）

第3号土坑（1・2）と第1号住居跡から縄文土器片（3～17）が出土した。第16図の拓影図の主体的な土器は、関東の晩期安行系である。1は、降起帶縄文上に付される突起貼付文に縦位の刻み付けられ、形状が豚の鼻に似ている。2は、入組磨消縄文で豚鼻の突起を有する。3～11は、入組磨消縄文が施されている。12は、台付鉢で脚部に太く粗い縄文が施され、脚部の貼りつけ部に楕円形の窓が巡らされている。また、朱塗りも施されていることから、祭祀に使用されていたと思われる。13は、沈線による三又状入組文が施される。14・15は、太い粗い縄文と太い沈線による区画文が特徴的であり、15は、内面にも付される沈線文が特徴的である。17は、無文地に沈線文様が描かれている。

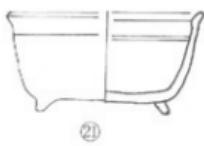
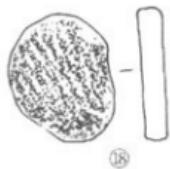
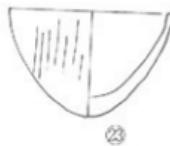
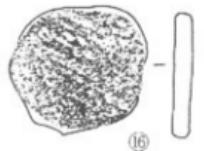
第2号住居跡から土師器の壺形土器（19・20）が出土した。19は、完存率50%で、底部は欠損している。体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。口径14.2cm（推定）、器高4.2cm、底径は不明である。体部内面黒色処理後ヘラ磨きが施され、外面はナデが施されている。胎土は砂粒・長石を含み、焼成は普通、色調はにぶい橙色である。20は、完存率60%で、底部は平底で、体部は内湾しながら外上方へ立ち上がっている。口径11.0cm、器高2.5cm、底径5.8cmである。底部は回転糸切り後、外周部のみ手持ちヘラ削りが施され、体部内・外面は水挽き痕は弱い。胎土は砂粒・雲母・長石・石英を含み、焼成は普通、色調はにぶい橙色である。

第3号住居跡から土師器の高台付壺形土器（21）が出土した。21は、完存率40%で体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。高台は短く、外下方へ外反し、端部に面をなす。口径11.4cm（推定）、器高5.3cm、高台径7.9cm、高台高0.7cmである。体部内・外面は水挽き痕は弱い。高台は貼り付けている。高台内・外面ナデが施されている。胎土は砂粒・長石・雲母を含み、焼成は普通、色調はにぶい橙色である。

土師器の壺形土器（22）と塊形土器（23）を表面採集した。22は、完存率80%で、底部は小さく凹でおり、胴部はほぼ球形を呈している。口縁部は「く」の字状に開き、端部は丸みを帯びている。口径8.0cm、器高6.3cm、底径2.0cmである。胴部内面ナデ、外面縦位のヘラナデ、口縁部内面横位のヘラナデ、外面ナデが施されている。胎土は、砂粒を含み、焼成は普通、色調はにぶい橙色である。23は、完存率100%で、底部が丸底で体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く直立している。口縁端部は丸い。口径9.6cm、器高6.3cmである。体部外面縦位のヘラ削り、内面ナデ、口縁部内・外面ナデが施されている。胎土は、砂粒を含み、焼成は普通、色調はにぶい黒黄色である。



第15図-1 (1~15) 出土遺物実測図



5 CM

10 CM

第15図-2 (16~23) 出土遺物実測図



第16図 拓影図 (1~17)

ま　と　め

友部町は、茨城県のほぼ中央にあって、JR常磐線・水戸線の分岐点である友部駅を中心に市街地を形成し、常磐自動車道の岩間ICと隣接している。そして近年国道や主要県道の貫通する交通要地としての立地条件から旭町を中心に宅地造成がすすみ、人口増がめざましい。平成10年1月、現在の人口は35,000を有し、笠間西茨城地区では、最も人口増と都市化が進行している。さらに現在建設中の北茨城自動車道と常磐自動車道のジャンクションが設定され、そこに110haにおよぶ総合流通センター等の施設が整備されることで一段と人口増と都市化に拍車をかけ大きく変革しようとしている。

この開発の進展に伴っておこる問題は、埋蔵文化財の保護との調整である。町教育委員会は、現状保存を前提に、開発側と協議を重ね、現状保存できない遺跡については、発掘調査を実施し、記録保存の処置をとってきた。

市街地の周辺部にあたる当該地は、平地林と畠地が広がる農業地域である。しかし、ここ数年前から民間業者による開発計画がたてられ遺跡保存の調整がなされ、開発を見送った経緯があった。平成9年春、再び民間の開発業者から申請があがり、発掘調査による記録保存を条件に調整が行われた。その結果、調査費は原団者負担の原則に従って開発側が負担することで調査を実施することになったのである。

本調査に入る前に確認調査を実施したところ表土から30cm足らずで遺構面に達した。遺物の多くが細片で、その散布状況等から、表上の移動が何回も繰り返され、遺構が擾乱されていることを予想した。

本調査に入り、表土除去を慎重にすすめると、主要な遺構は擾乱されていて、住居跡は床面が露出した状況であった。そのため、住居跡の立ちあがり部分の検出が困難をきわめた。そのため部分的な遺構から想定し、実測図を作成しなければならなかつた。

出土遺物は、ことごとく細片で接合しても形態を把握することは困難であった。そんな中で縄文晩期の安行系等の特徴をもつ遺物が出土している住居跡1軒と、土師器の甕・壺・台付壺等の出土から古墳時代に比定される住居跡2軒が検出できたことが成果であった。

一方、この調査で注目されたのは、2条の溝の検出であった。第1号溝は調査対象地の東西の長さ26.6mで両端とも調査エリア外に延びている。上幅1.90~3.40m、下幅0.70~1.50m、深さ0.70~1.00mで、断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦であるが、中央部はさらに、幅30cm、深さ20cmほど掘り込まれている。また、溝の両袖に幅20~60cm、確認面から深さ17~52cmの多数の柱穴が検出できた。

この遺構の検出状況からこの溝では、中央部に板状の物を立て、多くの柱穴は、それを支える柱であったと考えられる。第2号溝は、上幅0.75~1.00m、下幅0.30~0.40m、深さ0.30~0.50mで、1号溝と同じく逆台形状を呈し、底面は平坦であるが、柱穴は見あたらなかった。よってこの2条の溝は、時期・性格については不明であるが「館」に伴うものではないかと考えられる。

友部町史によると

『長峰城跡（矢野下字長峰）

明確な城跡の確認は出来ないが、附近一帯に土塁跡らしき地形がみられ、東側低地に富士池があり、さらに潤沼川へとつなげている。

また駒形室、館端、源平蔵、宝蔵などの字名が残り、千手観音堂があり信仰の場となっている。

長峰城跡に関しては、「藤姓中里系図」に横田綱俊の三男綱利が永亨12年（1440）結城合戦に武功をあげ、将軍義教より穴戸の長峰に領地を賜り、城を構え居住した』

藤姓中里系図（土師中里輝夫氏所蔵）



とあり、長峰城跡がこの附近にあったのではないかと考えられている。

今回の調査地点は、東に富士池、館端、源平蔵とよぶ地が立在し、千寿院跡は千手観音堂の北側に位置し、さらに長峰の字名のある地から200mほど南東にあることを確認している。

この長峰城跡にくわしい文化財審議委員の小谷清司氏から、明治15年大日本帝国参謀本部陸軍部測量局作成の地図を提供していただき、この溝は長峰城に関するものではないかとの御教示までいただいた。地図には、長峰の字名の近くに、土壘と思われる地形が山状に描かれ、小径か堀か不明であるが東へ点線がみられた。

現地踏査すると、今も土壘や溝らしき地形が山中にみられ、明治期には、もっと明確な地形が残っていたと思われる。調査地点が城跡内であると推定され、溝や防備上の土壘の構築のため、耕作地以前に土の移動があったのではなかろうか。

前述したように、この遺跡は表土が浅く、遺構が損なわれているのは、そのためであると推定することもできる。将来、今回の調査で検出された溝についてこの周辺の調査を行うことで、館跡が解明されることを期待したい。

最後に、この調査に協力された和光不動産やジャパンプランニング社に敬意を表すると共に、

御指導、御助言をいただいた調査会や教育委員会、直接作業に従事された調査協力員の皆様に感謝を申し上げ、まとめとしたい。



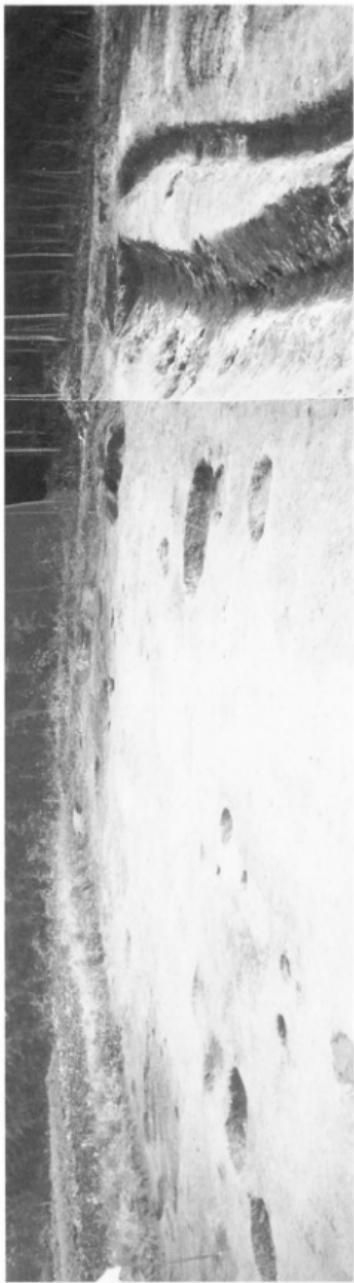
明治15年 大日本帝国参謀本部陸軍部測量局作成地図

図 版

溝断面（西ベルト）



遺跡全景



溝 1号 (左) 2号 (右) 全景

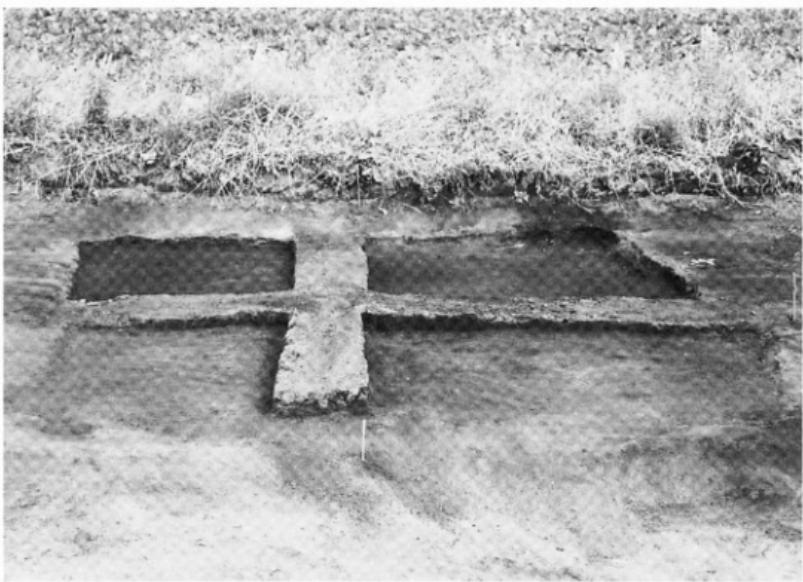




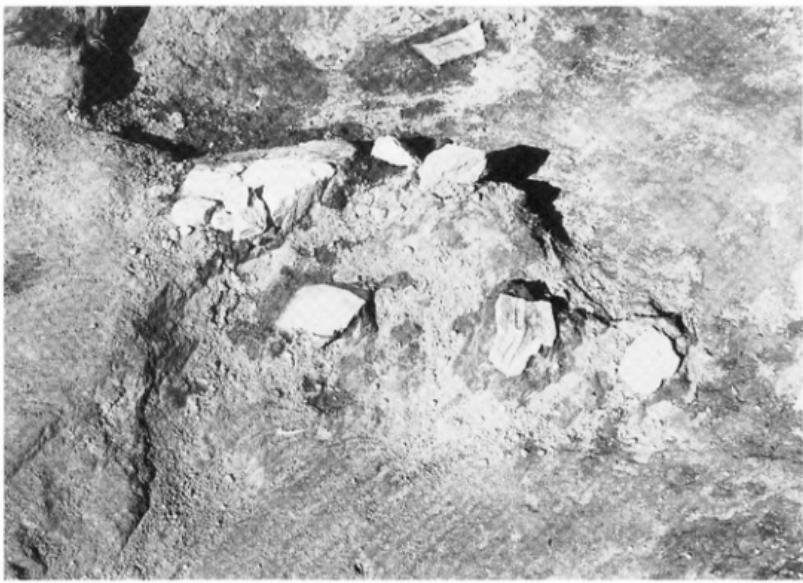
第1号住居跡遺物出土状況(1)



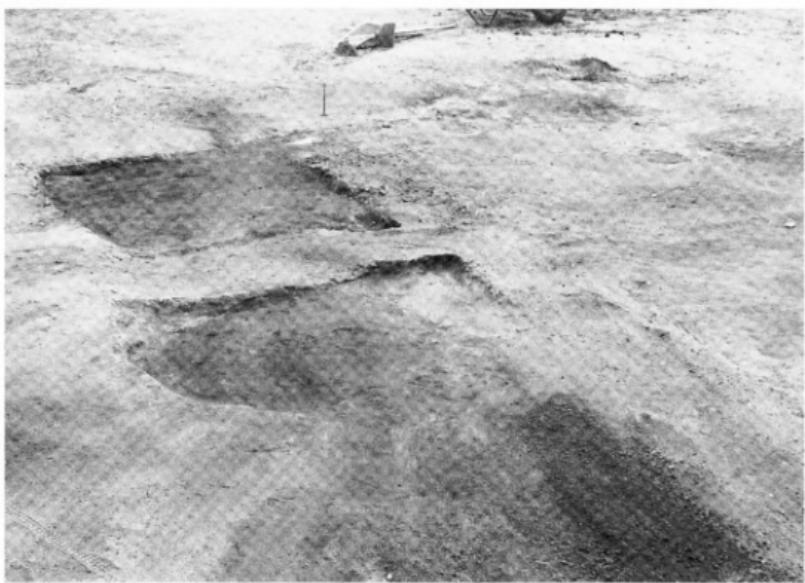
第1号住居跡遺物出土状況(2)



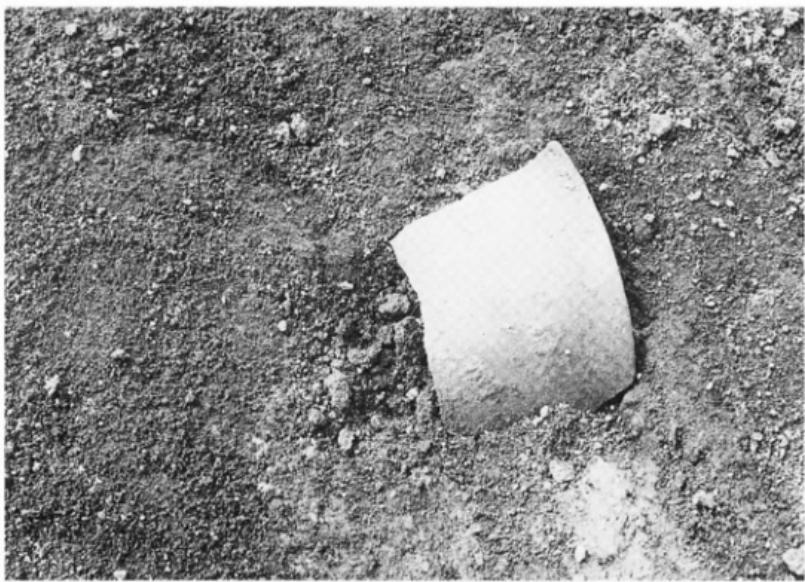
第2号住居跡全景



第2号住居跡土師器出土状況



第3号住居跡全景



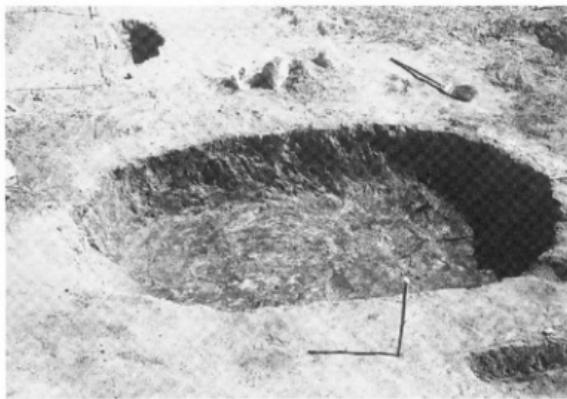
第3号住居跡柱穴より土師器出土状況



第1号土坑全景



第2号土坑全景



第3号土坑全景



第4号土坑全景



第5号土坑全景



第1号屋外炉跡全景



第2号屋外炉跡全景



第3号屋外炉跡全景



第1号土坑出土石器



縄文土器(1)



縄文土器(2)



繩文土器(3)



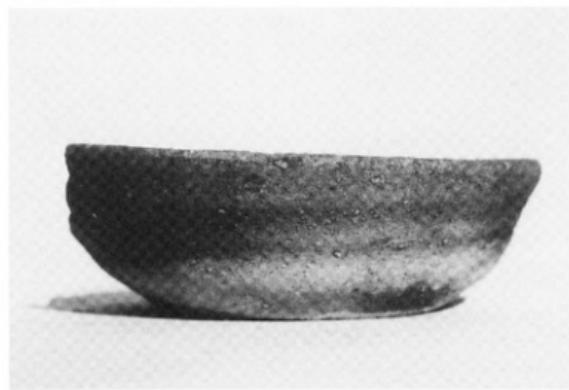
土師器(1)



高台付坏



培



坏

土師器(2)



石器(1)



石器(2)



石器(3)



石器(4)



石器(5)

上郷遺跡発掘調査報告書

平成10年3月

編 集 上郷遺跡発掘調査会

発 行 友部町教育委員会

印刷所 (有)ミツギ印刷社

